

# 吉井源太と明治

《27》

## 紙業組合の巡回教師に

吉井源太らが明治十三（一八八〇）年に伊野で作った、土佐紙の改良などを目指した製紙社は三年で解散することになった。

その翌十七年に源太は、伊野町で仲間の土居熊繁らとともにごく少人数で七幸組というものを組織し、長

となった。改良紙の標本を作り、海外からの注文を受けようとした。県庁を通じて各国領事にこれらの標本を送った。コッピ紙や、中国の紙に似た弘漣紙と言われるものの注文があった。

弘漣紙の中国からの注文は大量で、七幸組だけでは応じることができず、大阪の紙商を通じて輸出することになった。しかし、これ

が盛んになるとする矢先に、この紙商に販路を奪われ、組は不振に陥った。

この中国向け販路は履歴書の書かれた明治後期でも絶えることなく発展していると書かれている。

結局この七幸組は同十九（一八八六）年に解散することになった。このあと源太は、同二十一（一八八八）年に伊野町で製紙改良組を設立して長となる。横浜に居留している外国商人の注文に応じて、典具帖紙やコッピ紙を製造した。また、文部省や東京の書店の製本用紙なども製造したとされる。

一方、七幸組解散と同じ年に、土佐紙業組合が設立されることになる。源太は

ここで委員に選ばれ、技師の役目を受け持つことになった。この組合の頭取は、育見会の設置に力を入れた中山秀雄であった。

この紙業に着手するのは同十八年ごろのことと矢野城樓著「中山秀雄」にある。自分の製紙工場も持った。しかし、同書によれば、このころは高知県下で反政府

感情の激化があり、混乱の中での紙業組合の設立は、あまり成果を上げることができなかった。また、紙業者たちもその必要性を理解せず、賛同が得られなかった。

に終わったといえる。これらの動きは、同二十九（一八九六）年に紙業取締規則の施行を基にした土佐紙業組合が設立されることによって初めて完結した。石田英吉知事による施策であった。これと同時に

このころの日記からは、県内紙業地を巡回して組合の必要性を説明し、加入するよう説得してまわっている源太の姿がよくわかる。そして、相手からは組合への疑問が口にされることが多い。

この新しい土佐紙業組合は加入が義務化されたものであり、違反者には罰則も決められていた。ここで源太は巡回教師兼顧問に任命され、以後の生涯をこの身分で県内各地の巡回指導による土佐紙の紙質維持・向上に努めることになる。

この組合は同二十四（一八九一）年に解散になる。政治的な混乱があり、また和紙業界内部の意識も整わない状況の中、源太らは紙業の発展をめざした組織作りで奮闘して、そして失敗

（京大大学院研修員、京都府在住）



七幸組の製造者印（いの町紙の博物館蔵）